

「観音さまはどい」

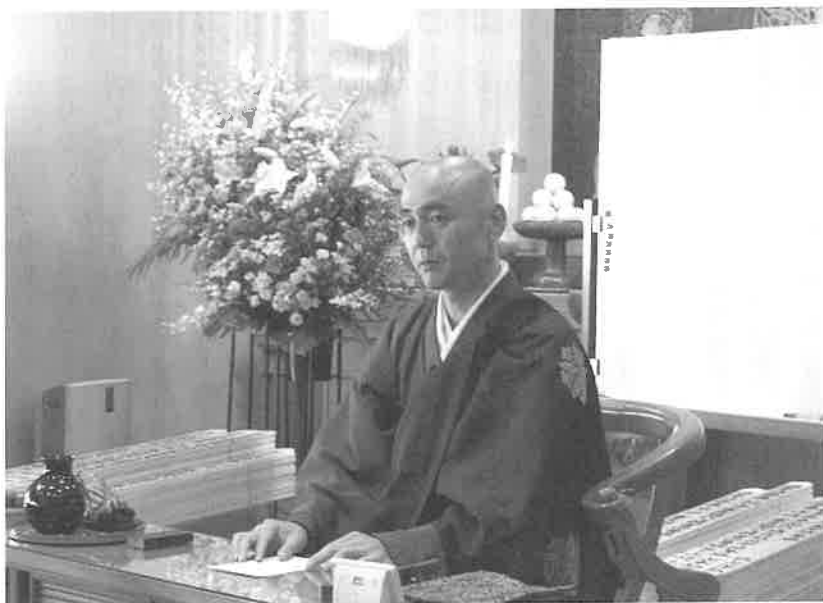
山梨県甲府市 長泉寺住職 水庭 浩 章

鎌倉街道から日野公園墓地への緩やかな坂道を進むと、左手に大きな石碑が目飛び込んできます。「善光寺参道」。そう、ここは国内外への仏教布教の拠点、横浜善光寺の参道です。その石碑を過ぎて少し進むと、いつもなら善光寺の釈迦殿が見えてくるのですが、その前に存在感のある新しい大きな建物が……、善光寺釈迦殿同様、独特な丸みのある銅葺きの屋根、その堂内には、金色に輝く聖観世音菩薩立像が慈しみの表情で迎えてくださいます。

令和二年九月、善光寺の新たな信仰の場とし

て、観音堂が建立されました。観音さまは人々の声を聴き、救済させる菩薩さまとされています。そのお姿は前のめりで、いつでも直ぐに救済に駆け付ける、慈悲心を体全体で表しています。

元々は如来（しょうぼうみょうにょらい）で、衆生済度のために菩薩のお姿になられて世の中に出られたとされています。また、衆生済度のほうからいうと「観世音菩薩」といい、自己の修行のほうからいうと「観自在菩薩」といいです。『般若心経』の冒頭にでてくる菩薩さまですが、同じ



菩薩さまのことをいっています。

さて、私たち曹洞宗侶が観音さまとって真っ先に思い浮かべるのが、大本山永平寺御開山、道元禅師さまがお示しく下さいました『正法眼蔵 観音の巻』です。観音の巻には、ある中国の二人の禅僧のやり取りが書かれています。

その二人とは、雲巖曇晟うんがんどんじょう和尚と道吾円智どうごえんち和尚の兄弟弟子で、ある日、観音さまについて論議を交わしていました。

雲巖和尚さまが、「観音さまは、そこばくの手眼をもちいてなにをするというのだ」(大悲菩薩へ観音さまのこと)、用許多手眼作麼)とおっしゃいました。すると、道吾和尚さまが「人の真夜中に後ろ手で枕を探るようなものだ」(如人夜間背手探枕头)とお答えになられました。

雲巖さまのお言葉は、一見、道吾和尚さまに質問を投げかけているようにみえますがそうではありません。観音さまをいいぬいているお言

葉です。「許多そごばくの手眼をもちいて」とは、数に

限定されないということです。十一面とか、三十三身とか、千手千眼とか、八万四千とか、そのような限定された数の話ではありません。ありとあらゆるものが観音さまの手であり、ありとあらゆるものが観音さまの眼であるということです。

それに対して、道吾さまは「如人夜間背手探枕子」とおっしゃいました。これも、雲巖さまに対抗してお答えになられたのではありません。同じように観音さまを言いぬいておられます。

夜間は真つ暗闇ですから何も見えません。目的の枕も見えない。ですから、後ろ手で枕を探るのですが一向に見つかりません。その枕が「観音さま」です。

ところが、雲巖さまのお示しにあるように、ありとあらゆるものが、自分自身も含めて観音さまですから、他に観音さまを探しようがありません。

ません。

このお二人の「観音」論議は、その後も続きます。さまざまな表現を使って違うことを言っているようにみえても、全く同じことをいっています。優劣をつけることはできません。

道元禅師さまも、「比量の論にあらず」と比較できるものではないとおっしゃっておられます。

このお話から、観音さまはどこにいらっしゃるかということがわかります。「観音さまは釈尊の慈悲心をあらわしたもので実在の人ではない」といわれていますが、そんなことはありませんね。この世のありとあらゆるものが観音さまで、そうでないものではありません。

森羅万象一切合切が観音さまの手であり、観音さまの眼であり、観音さまの口です。そのひとつひとつが、観音さまの行いであり、まなざしであり、おこえである。すべてが観音さまの

慈悲心であるということです。当然、私たち自身も観音さまです。そう思えないような人も、観音さまが発心せずにそこにいるというだけのことです。その自らの観音さまを自覚して行いを修めていくことが大切です。それが、「観自在菩薩」です。

さて、そこで問題になるのが、自分自身が観音さまの行いをしているのかどうかということです。

私事ですが、今年の八月末に手術をしました。その手術とは、原因不明の震えの病氣、「本態性振戦」の治療として、震えを起す脳の一部に超音波の熱を集中させて焼くという「集束超音波治療」です。

私は、二十代前半にこの病気の症状が始めました。特に疲れが溜まるときに症状が出やすく、処方された薬を服用しながら震えを

抑えていました。しかし、加齢とともに症状が頻繁に出るようになり、薬の効果も徐々に薄れてきていました。

そんな時に、病院の先生からこの治療を勧められました。最先端医療で治療数が少なく、更に脳の手術ですから不安も大きかったのですが、治したいという思いと、自分の症例が後の人の役に立てばという思いで手術を受けることに決めました。

手術が無事終わり、症状は劇的に改善しましたが、術前に説明を受けていた後遺症が出きました。

術後、一時的にふらつきや言語障害の症状が出るが、ほとんどの場合、一から三か月程度で改善されるといふものでした。私の場合、その二つの症状以外に、手が思うように動かないという症状もありました。

退院して三日目のこと、ふらつきを感じなが

からも普通に日常生活をおくっていた私は、棚の高いところにある物を取ろうとしました。その時に、棚に置いてあるものが崩れ落ちてきました。それを支えようとした瞬間、体のバランスを崩し、何とか立て直そうとしたのですが体が思うように動かず、左足の小指のうえを、体重のかかった右足の踵で踏んでしまい、あまりの激痛にその場でうずくまりました。

病院で診てもらうと、左足小指の亀裂骨折と診断されました。

それから三日後、包丁を扱っていた時のことです。左腕が思うように動かず、右手の親指部分をかなり深く切ってしまいました。

手は痛い、足は痛い、体は思うように動かない。剃刀がうまく使えなかったり、少しの段差で躓いたり、まっすぐに歩いているつもりが壁にぶつかったり、自分の体が自分の体のようには思えませんでした。後遺症のことは聞いてはい

ましたが、想像以上でした。

思うようにならない体にストレスを感じ、こんなことなら手術をするんじゃないかと思ったときもありました。

自分の体が思うようにならない苛立ち……、そういえば私自身、お説教の時によくそのようなお話をしていました。お釈迦さまが成道後、最初のお説法でお説きになられた「四苦八苦」のなかに、「老苦」と「病苦」があります。年老いて、或いは、病によって自分の体が思うようにならない、思うように動けない苦しみということです。

私は、その苦しみを知ったつもりでお話ししていましたが、実際にはわかっていませんでした。自分の思うようにならない体で過ごすことがどれだけ苦痛なのか、私は今回、自らの体で体験し、少しわかったような気がいたします。

十人十色といわれるように、人の感性はそれ



それです。同じ事で自分はたいしたことがないと思っても、それを苦痛と感じる人もいる。自分の感受性だけで判断することが如何に危険なことなのか、改めて感じました。

いま、コロナ禍において、私たちひとりひとりにそのことが問われています。この新種のウイルスに世界中の人々が翻弄されています。

この状況で危惧されること、それは「差別」と「偏見」です。

現代に生きる私たちが、これまでに経験したことのない事態ですから、皆この感染症を我がことと捉え、感染に対する恐怖を身近に感じていると思います。未知のウイルスのことを思うと不安になり、自己防衛に対する意識が強くなって、他者に優しさを差し伸べる意識が薄れていくように感じます。

そのことが、歪んだ正義感になって表れてい

るところもあると思います。「自粛警察」というものがその最たるものでしょう。

SNSによる、まるで犯人捜しのような感染者の特定、誰しもが感染する可能性があるのに、感染者が「悪」とされてしまう偏見、それ故に、感染された著名人方が「お詫び申し上げます」と、感染して苦しいはずの本人が謝罪することに、とても違和感を覚えます。これは、感染者に対する人権侵害ともいえるでしょう。

このこと以外にも、感染者に関わる医療従事者に対する差別、職業に対する差別、地域に対する差別が罷り通る、そのようなことを目にする心が痛むと同時に、非常事態時における人間のゆとりのなさを感じます。

しかし、よくよく考えてみると、確かに、中には軽率な行動によって感染してしまった人もいます。誰しもが感染したくて感染しているのではないのです。そのことを、歪ん

だ価値観でみるのではなく、正しい眼をもってみるのが大切です。

その「正しい眼」が、観音さまの「眼」に他なりません。慈悲のまなざしです。

今般のコロナ禍で、自分自身の、或いは家族の身を守ることを最優先に考えた方も多いと思います。その考えが間違っているわけではありません。ただ、それ故に、自分の価値観を、他人に押し付けていることはないでしょうか、価値観の合わない人を、様々な手段で攻撃していることはないでしょうか。

何度も申し上げているように、感じ方は人それぞれです。ひとりでは生きてゆけない世の中において、自分の価値観を押し通すことが如何に無意味なものなのか、よくよく考えればわかることです。

私自身、今回の病気で気づかされました。人の気持ちに寄り添うということは、自分の価値

観を出すことなく、その人の価値観に合わせる努力をすることに他なりません。そのことを気づかせてくれた今回の病気は、間違いなく「観音さまの手眼」であるといえるでしょう。

観音さまのお像は、私たちを映し出す鏡といえます。また、この世を映し出す鏡ともいえるでしょう。観音さまを自分の外側にみるのではなく内側にみる、この世の中を外側にみるのではなく内側にみる。

あらゆるものが観音さまであり、休むことなく、手は行い抜き、眼は見抜き。口は説き抜いています。あとは、それを感じる側の問題です。つまり、自分自身が観音さまであるという自覚をもって、観音さまの行いを、日々修めているのかどうか、人々の迷いや苦しみに自分の価値観を出さずに寄り添うことができているのかどうか。観音さまを内側からみるということは

そういうことです。

善光寺住職が法要の度にお唱えされている「世界平和」、それは、仏教徒の大誓願であり、観音さまの願いです。その誓願を形に表したのが、この度完成した観音堂といえるでしょう。

善光寺観音堂が、世界平和と衆生済度を実践する新たな信仰の場として多くの人々をお導きくださる、そのことを切に念じております。



